



# 双塔

カトリック新潟教会

2017年9月  
No. 352

## ヨーロッパ便り(1)

協力司祭 ロレンゾ・ホセ・ルイス

初めに、私のヨーロッパの旅を皆さんに分かち合いたいと思います。8月2日にローマに着いて、一晩、神言会の本部に泊めてもらって、次の日にドイツのベルリンに行きました。そこで働いているフィリピン人の神父様がいて、彼のフィリピン人司牧の活動を体験させてもらいました。フィリピンからの二人のクラスメイトもいたので、同窓会にもなりました。そして、ベルリンから私たち三人でオーストリアのウィーンに行きました。そこもフィリピン人の司祭がいて、彼もフィリピン人たちの司牧の活動をしています。そして、ウィーンからオランダのアムステルダムまで私たちは高速バスで行きました。17時間の長い旅でした。アムステルダムにもまた神言会のフィリピン人の神父様がいて、彼の教会でもまたフィリピン人の共同体に会わせてもらいました。8月13日にアムステルダムから第三修練の行われるシュタイルという町に電車で行きました。

オランダのシュタイルという小さい町で神言修道会の歴史が始まりました。ここで創立者の聖アーノルド・ヤンセンは最初の修道院を建てました。今年の8月15日にアジア、アフリカ、アメリカから29人の神言会の司祭たちと修道者たちが第三修練のコースに参加するため、ここで集まりました。ご存知のように、その一人はこの私です。

これを書いている今、すでに一週間が経ちました。私たちはお互いの名前と属している管区を知らずながら、修練期のときに勉強した神言会の歴史をあらためて新しい目で復習しています。今回は現場で勉強していますので、やはりいろんなことが面白くなっています。まだ始まったばかりなので、これから神言会だけではなく、聖霊会のこともし勉強することになっています。私たちは、ここには9月6日まで滞在する予定です。そのあとはローマに行きます。そこで12月の8日まで第三修練のコースを続けます。

それでは、今回の便りはここまでで終らせていただきます。私のためにもお祈りしていただければ、幸いです。よろしくお祈りします。主の平和。ロレンゾでした。

平和祈願ミサ 菊地司教様の説教から

- \* 7月26日は相模原の津久井やまゆり園で起こった殺傷事件から一年であった。何より恐ろしく悲しむべきは、犯人の青年の考え方に賛同する人が少なからずこの社会に存在していること。10年前、20年前であれば、それは一人の特異な思想で終わったかもしれないが、今日ではインターネット上でたちまち拡散し、「自分だけがそう考えていると思っていたが他にも同じ考えの人がいて、ホッとした」などの書き込みすらある。
- \* 正義と平和。正義を語ることに對して人々の反対が起こるのは人間社会の常。平和のためには一人ひとりの回心が必要。社会で起こっていることは一人ひとりの心の反映であり鏡でもある。
- \* 平和は神の意志の実現。一人ひとりの心の回心と、神に向かって歩いて行けるように。

■ 聖母の被昇天のお祝い ---- 8月15日(火) 10:00 ----

8月のこの時期としては比較的凌ぎやすかったこの日、ミサには新潟教会だけでなく新発田教会や白根教会などからも参加があり、70名ほどが集い、聖母の被昇天とタルチシオ菊地司教様の霊名の祝日とともに祝った。派遣の祝福の前に司教様に霊の花束が贈呈され、司教様は聖タルチシオについて「初代教会の助祭で、迫害の中ご聖体をミサに参加できない信徒のもとへ運ぶ途中捕らえられ殉教したといわれている。侍者の保護の聖人」と紹介された。

ミサ後の祝賀会はバーベキューパーティー。恒例のスイカ割りでは、5年生の〇くんが初回で「ボン!」。見事に真っ二つに割れたため、スタッフがデザート用に準備していた2個目も急遽スイカ割り用として提供。子どもたちがチャレンジするたびに歓声が上がっていた。

菊地司教様の説教 要旨(全文は「司教の日記」参照)

- \* 大きな災害や紛争のあったことを「忘れない」ということは、記憶にとどめるだけではなく、助けを必要としている人とともに寄り添い、ともに歩いていくということだが、それは神がすでに聖体の秘跡に於いて実行して下さった。神はすべての人を自らの手のひらに刻み付けるとまで約束して下さった(イザヤ49・15-16参照)。
- \* 教皇フランシスコは『福音の喜び』の中で、「教会の福音宣教の活動には、マリアという生き方があります」と述べて、聖母のエリザベト訪問のことを取り上げている。マリアは自らの都合はさておいて、思いもよらぬ人生の出来事に戸惑っているであろうエリザベトのもとへ出かけていった。
- \* 1981年に広島を訪問した教皇ヨハネ・パウロ二世は平和メッセージの中で「過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです」と、4回も繰り返された。いま、東アジアの一角で起こっている現実の中で、「忘れない」信仰に生きているわたしたちは、教皇ヨハネ・パウロ二世の呼びかけに応じて、「過去を振り返り」、その上で今、将来に対してどのような責任ある行動をとるのか考えなければならない。